対人認知構造の基本次元についての一考察 *

林　　文　俊[1)]

I　問　　題

Bruner & Tagiuri(1954) およびCronbach(1955)は，人は他者のパーソナリティを判断する場合に，比較的安定した一連の偏りを持っていることを指摘し，これを個人の持つ「暗黙裡のパーソナリティ理論(implicit personality theory 以下，I. P. T. と略記)」と呼んだ。人は他者についての情報を自己の持つI. P. T.に照して解釈し，推論を行ない，これに基づいて当該他者の行動を理解したり予測したりする。この意味で，対人認知過程を究明するには，個々人の持つI. P. T. を分析することが，とりわけ重要な検討課題となる。

筆者は，これまで，I. P. T. における次元性を強調した仮説的構成概念として，対人認知構造を「人が他者のパーソナリティ認知に際して働かす多次元認知空間」と定義し，その構造的特徴の個人差をいかにして測定すかといった方法論的問題に関して若干の検討を加えてきた(林，1976*a*，1976*b*，1978*a*)。しかし，このような研究をさらに進める上には，個人差を問題とする前に，まず人々が他者のパーソナリティを認知する場合に共通して働かす基本次元の内容を明確にしておくことが不可欠である。

従来，この種の問題に対しては，主として因子分析法，多次元尺度構成法(MDS)などの手法に基づいていくつかの研究がなされている。例えば，Levy & Dugan (1960) は顔写真を用いたパーソナリティ評定資料を因子分析し，一般的評価バイアス(general evaluative bias)，有害性(harmfulness)，信頼性(dependability)，愛想の良さ(affability) の4因子を抽出している。また，飯島(1961) は，人のパーソナリティ特徴を表わす30組の特性形容詞対により，相互に未知の大学生に相手の印象を評定させ，社会的活動性(social activity)，魅力性(attractive)，道徳性(moral) と解釈される3因子を見いだしている。さらに，Norman (1963) は相互指定評定(peer nomination rating) の方法を用いて被験者が日頃よく知っている人物のパーソナリティ特徴を判断させ，外向性(extroversion)，温厚性(agreeableness),良心性(conscientiousness)，情緒安定性(emotional stability),文化(culture) の5因子を得ている。中里・Bond ・白石(1976) は，このNorman(1963) の5因子説の妥当性を我国の被験者で検討し，Norman 尺度の翻訳版を用いた実験Ｉでは，ほぼ同様な因子構造が析出されたが，長島ら(1967) が開発したSelf-Differential (FormA) 尺度の修正版を用いた実験Ⅱでは，強靱性(意欲性)，篤厚性，外向性の3因子しか析出されなかったことを報告している。その他，大橋ら(1973，1975)は，顔写真ならびに言語的刺激によるパーソナリティ評定資料から，社会的望ましさ，活動性，個人的親しみやすさの3因子を解釈しており，林(1978*b*) もこれと同様の結果を得ている。

上述した他にも，人が他者のパーソナリティ認知に際して働かす次元を検討した研究は数多くあるが，この領域における最も大きな問題点の1つとして，抽出された諸次元の内容に関して，研究者相互の比較検討がなされていないことが指摘できる。すなわち，これらの研究で扱われている刺激人物は，被験者が未知の人物，既知の人物，あるいは対人状況に関係した概念といったようにまちまちであり，評定に用いる尺度も研究者毎に異なっている。また，資料収集の方法および分析方法の差異も得られた諸次元間の比較検討を一層困難なものにしている。Levy & Dugan (1960) が見いだした信頼性の因子は，Norman (1963) のいう良心性に対応するのであろうか。中里ら(1976) の実験Ｉと実験Ⅱで得られた各因子は相互にどのような関係にあるのか。さらに，そもそも対人認知構造を構成する基本次元としていくつの次元を設定すればよいのだろうか。

刺激人物の種類の違いにかかわらず，人はある程度同じような内容の諸次元を用いて他者のパーソナリティを認知するかどうかを調べたものに，Mulaik (1964) やPassini & Norman (1966) の研究がある。前者は，刺激

＊　本研究の資料分析のための計算は，名古屋大学大型計算機センターのFACOM230－60／75によった。

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）教育心理学専攻

THE FUNDAMENTAL DIMENSIONS OF INTERPERSONAL COGNITIVE STRUCTURE. by Fumitoshi HAYASHI.

が現実の人物，ステレオタイプ的人物，さらには特性語と変化しても，そこから得られる因子構造にはほとんど差異がないことを見いだしている。また，後者は，認知者が刺激人物を熟知している場合と知らない場合とを比較して，いずれもNorman（1963）の5因子構造と同様な結果を得ている。このように，認知者が刺激人物を全く知らないにもかかわらず，熟知している人物の場合と類似した因子構造が析出されるのは，他者のパーソナリティ認知は，刺激人物のrealな特性構造そのものを反映したものでなく，認知者の持つ判断の枠組（I. P. T.）によって強く規定されていることを物語っている。すなわち，認知者は，他者のパーソナリティ特性を単に受動的に記録するのではなく，自己の持つI. P. T.によって認知内容を選択し，体制化させる。このような結果は，個々人が持つI. P. T.に共通して内在する基本次元を整理しようとする本研究の方向づけを支持している。

ところで，Rosenberg & Sedlak（1972）は，他者のパーソナリティ認知の次元を扱った研究をレヴューし，これらの諸次元とOsgood（1957）のいう内包的意味（connotative meaning）の3次元－Evaluation，Potency，Activity—との関連を論じている。Osgood（1962）によれば，人格概念の評定においても，"良い－悪い"といった評価の次元が対人的イメージの大部分を説明し，他の次元は取るに足らないものであるとされる。実際，既に示したごとく従来の研究で抽出された次元の多くは，評価的色彩を強く帯びたものであり，評価次元が対人認知構造の中核を成すことは，これまで幾多の研究者によって主張されてきたところである。しかし，いわゆる"良い－悪い"といった単一の評価次元だけでもって対人認知構造の基本次元を考えることは，はなはだ不十分であろう。この点に関して，Rosenberg，Nelson，& Vivekananthan（1968）の研究は，重要な知見を提供している。すなわち彼等は，人のパーソナリティを表わす特性形容詞間の距離評定資料をMDSで分析して得られた刺激布置構造がsocial good－badとintellectual good－badといった2次元から解釈されることを見いだし，これら両次元とHays（1958）がAsch（1946）の印象形成実験と同様な特性形容詞をMDS分析して得られた2次元[1]との関連を述べている。social good－badの次元は"暖かい－冷たい"で代表される社会・対人的評価の側面をさすのに対して，intellectual good－badの次元は"知的な－愚かな"で代表される知的もしくは課題関連的な評価をさす。その後，Hamilton & Fallot（1974）は，刺激人物に対する好感（liking）の判断にはsocial good－badの次元がより大きな規定力を持つのに対して，尊敬（respect）の判断にはintellectual good－badの次元が強い影響を及ぼすことを見いだした。一般的意味空間における評価次元を対人認知の場合にはこれら両次元に分けて考えることの有効性は，この他の2，3の研究においても確かめられている（Friendly & Glucksberg 1970；Levin，1973；中里，1977）。

本研究は，以上に述べた問題意識に立脚し，従来いくつかの研究で見いだされてきた他者のパーソナリティ認知における諸次元を，主としてRosenbergら（1968）が得た知見を枠組みとして整理することを目的としている。ここでは，特に，Levy & Dugan（1960），飯島（1961），Norman（1963），中里（1976）の実験Ⅱ，大橋ら（1973，1975），林（1978*b*）の6つの研究（以下，＜Levy & Dugan＞，＜飯島＞，＜Norman＞，＜中里＞，＜大橋＞，＜林＞と略記）をとりあげ，それぞれの研究で析出された諸因子（表1.にまとめて示した）間の関連について検討を加える。

Ⅱ 方　法

1. 尺度の構成

＜Levy & Dugan＞，＜飯島＞，＜Norman＞，＜中里＞，＜大橋＞[2]＜林＞が他者のパーソナリティを評定させるのに用いた尺度項目の内容を検討し，これら6つの研究のいずれかで用いられた特性形容詞対を79組収集した。この際，尺度の対語の一方または両方が異なっていても，その意味内容が同じと考えられるもの（"不活発な－活発な"と"おとなしい－活発な"，"責任感のある－責任感のない"と"責任感の強い－無責任な"など）は1尺度として扱った。これら79組の尺度に"良い－悪い"の尺度を重複させて計80組の対語から成るSD法形式の7点評定尺度を構成した。"良い－悪い"の尺度を2度重複させて使用したのは，評定の信頼性チェックの1つの目やすとするためである。

1）Hays（1958）は，多次元展開法を用いて析出されたこれら2つの順位次元の意味解釈を控えているが，その内容は次のとおりである。

DimⅠ：暖かい（warm）＞寛大な（generous）＞柔順な（submissive）＞愚かな（stupid）＞知的な（intelligent）＞支配的な（dominant）＞小心な（stingy）＞冷たい（cold）

DimⅡ：知的な＞支配的な＞冷たい＞寛大な＞暖かい＞柔順な＞小心な＞愚かな

2）大橋ら（1973）は，105組の評定尺度の検討を行なっているが，ここでは，最終的に選定された20尺度のみを問題とする。

表1.　6研究それぞれで抽出された諸因子の名称

大　橋（1973，1975）	第Ⅰ因子	積極性ないし活動性
	第Ⅱ因子	社会的望ましさないし評価
	第Ⅲ因子	個人的親しみやすさ
飯　島（1961）	第Ⅰ因子	社会的活動性（social activity）
	第Ⅱ因子	魅力性（attractive）
	第Ⅲ因子	道徳性（moral）
中　里（1976）	第Ⅰ因子	強靱性（意欲性）
	第Ⅱ因子	篤厚性（likableness）
	第Ⅲ因子	外向性
林（1978*b*）	第Ⅰ因子	個人的親しみやすさ（明朗性＋魅力性）
	第Ⅱ因子	社会的望ましさ（誠実性＋情動安定性）
	第Ⅲ因子	力本性（dynamism）
Levy & Dugan（1960）	第Ⅰ因子	一般的評価バイアス（general evaluative bias）
	第Ⅱ因子	有害性（harmfulness）
	第Ⅲ因子	信頼性（dependability）
	第Ⅳ因子	あいそのよさ（affability）
Norman（1963）	第Ⅰ因子	外向性（extroversion）
	第Ⅱ因子	温厚性（agreeableness）
	第Ⅲ因子	良心性（conscientiousness）
	第Ⅳ因子	情緒安定性（emotional stability）
	第Ⅴ因子	文　化（culture）

2. 被験者および調査期日

被験者は大学2年生男女74名であるが，評定の信頼性に疑問のあるものを除いたため，以下の分析では男子35名，女子35名の計70名が対象とされた。調査は1978年1月に実施した。

3. 手続き

まず，被験者に「この大学の学生の中で，①好きな人（あなたが日頃好感が持て，これからもつき合っていきたい人）および②嫌いな人（日頃好感が持てなく，これからもつき合いたくない人）をそれぞれ1人ずつ思い浮べてください」と告げて，各項に該当する人物のイニシャルを調査票に記入させた。次に，これら2人の刺激人物のパーソナリティ特徴を上記80組の尺度上で評定させた。評定にあたっては，「好きな人物が良い特徴ばかりを持っており，嫌いな人物が必ずしも悪い特徴ばかりを持っているのではないので，各人物のパーソナリティの全体像をできる限り正確に判断するように」と教示した。なお，評定の順序効果を考慮して，調査票は，80組の尺度項目を各20組の4群に任意に分け，各群を1ページに印刷したものをランダムな順にとじ合わせて作成された。

4. 分析の方法

本研究では，収集した資料を以下のステップにしたがって分析した。

1）．全79尺度上での評定結果の因子分析。

2）．6研究それぞれで使用された尺度群毎の因子分析（因子の再現性の検討）。

3）．因子得点に基づく，1）および2）において析出された諸因子間の関連性の検討。

この他，Kuusinen（1969）と同様の問題意識に立つ偏相関因子分析，刺激人物の好・嫌別に見た因子構造の差異についても附加的な検討を行った。

Ⅲ　結果と考察

1. 全79尺度上における評定結果の因子分析

好きな人物および嫌いな人物に対する全79尺度上での評定結果を合わせて，主因子法により因子分析した（サンプル数は，被験者70×刺激人物2＝140サンプル）。第Ⅴ因子までで全分散の約59%が説明され（図1.参照），これをバリマックス回転した。共通分散に対する各因子の占める割合（相対分散）は，第Ⅰ因子が56.1%，第Ⅱ因子が24.1%，第Ⅲ因子が11.4%，第Ⅳ因子が4.8%，第Ⅴ因子が3.6%となり，これら5因子に対する各尺度項目の負荷量は，表2～表7の右端に示されている。[1)]

1）表2～表7には，6つの研究の各々で用いられた尺度群毎に因子分析結果が表示してあるので，各研究者間

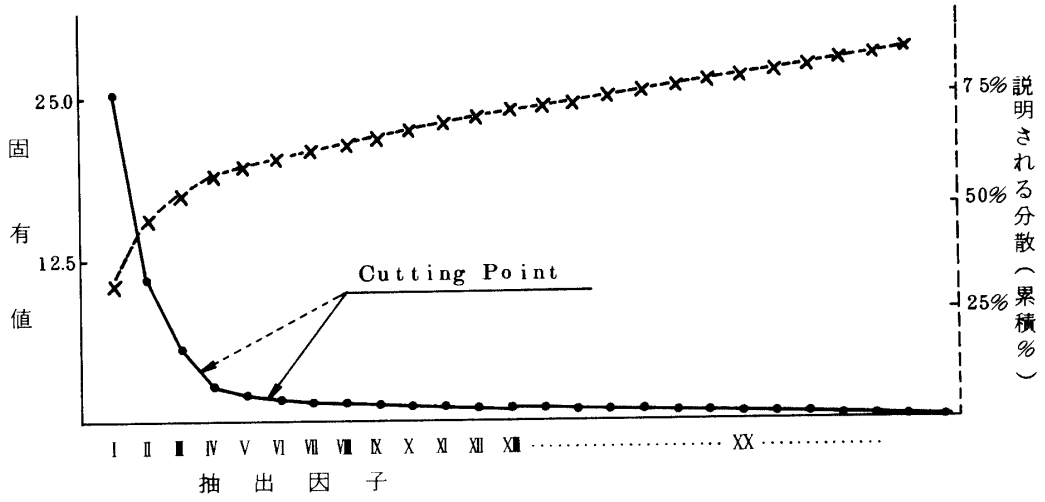

図1　因子抽出における固有値の推移

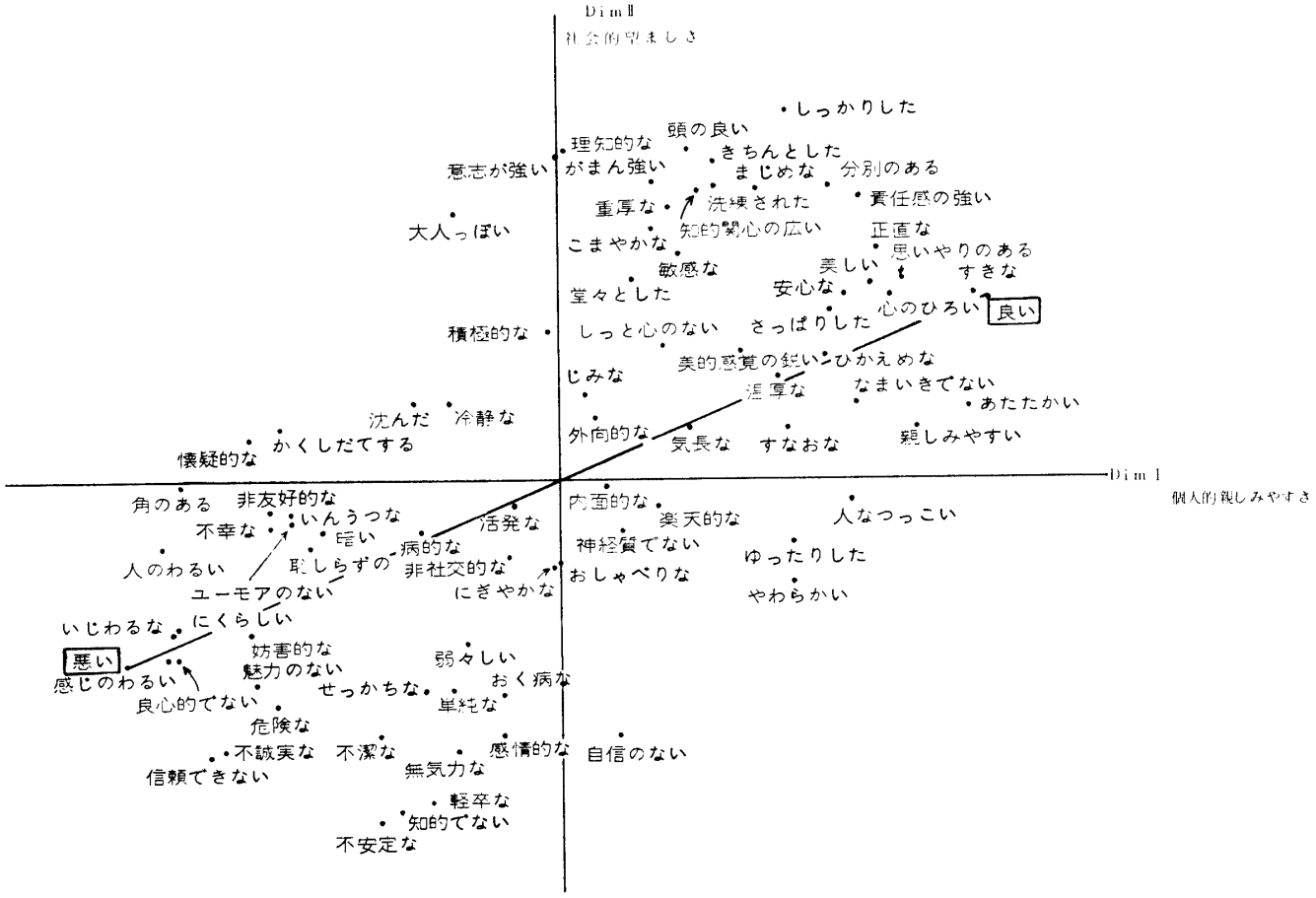

図2　個人的親しみやすさ×社会的望ましさの平面における各特性形容詞の位置

第Ⅰ因子に高い負荷量を示すのは，“良い－悪い”(－.84)，“きらいな－すきな”(.81)，“つめたい－あたたかい”(.79)，“人のよい－人のわるい”(－.77)，“感じのよい－感じのわるい”(－.76)，“親切な－いじわるな”(－.75)といった尺度項目である。したがって，この因子はいわゆる評価次元に属するものであるが，因子負荷のパターンを仔細に検討すると，この因子は，主として他者の全体的パーソナリティを自己との関係においてaffectiveに評価する側面を表わしていることが解かる。第Ⅱ因子には，“たよりない－しっかりした”(.72)，“安定した－不安定な”(－.67)“知的な－知的でない”(－.65)，“頭の悪い－頭の良い”(.65)，“感覚的な－理知的な”(.64)，“意志が弱い－意志が強い”(.64)，“慎重な－軽卒な”(－.63)といった尺度項目が高い負荷をもっており，この因子もいわゆる評価次元に属するものである。しかし，この因子は第Ⅰ因子とは異なり，他者のパーソナリティ特徴そのもの(特に，知的側面)に対する評価を表わしている。

図2.は，これら2つの因子から構成される平面に，各尺度の右側の極を成す特性形容詞を位置づけたものであり，これを見ると両因子が意味する内容の相違がよく解る。図中，一般的評価を代表すると考えられる“良い－悪い”の尺度が，第Ⅰ因子と約30°の角度をなす軸上に位置していることも興味深い。本研究では，これら両因子を解釈して，第Ⅰ因子を個人的親しみやすさの次元，第Ⅱ因子を社会的望ましさの次元と命名する。

第Ⅲ因子には，“おとなしい－活発な”(.83)，“静かな－にぎやかな”(.83)，“内向的な－外向的な”(.81)，“無口な－おしゃべりな”(.78)，“外面的な－内面的な”(－.75)，“社交的な－非社交的な”(－.74)，“うきうきした－沈んだ”(－.74)，“消極的な－積極的な”(.73)といった尺度項目が高い負荷量を持つことから，この因子は活動性の次元を表わすと解釈できる。

第Ⅳ因子および第Ⅴ因子の解釈は比較的困難であるが，第Ⅳ因子は温厚性または情緒安定性の次元を表わすものであろう。図1.に示した固有値の推移から見ても，本研究では抽出する因子の数を上記3因子に限定した方がより適切であるかも知れない。

2　各研究で用いられた尺度群毎の分析

次に，本研究でとりあげた6つの研究の各々で用いられた尺度群毎に評定結果の因子分析(主因子法，バリマックス回転)を行ない，因子の再現性などについて検討を加える。

まず，<大橋>尺度による分析結果を表2.に示す。[1] ここでは，固有値≧1.0の因子が3つ抽出され，これらで全分散の約56%を説明している。第Ⅰ因子には，“親しみにくい－親しみやすい”(.81)，“人のよい－人のわるい”(－.81)，“感じのよい－感じのわるい”(－.79)，“親切な－いじわるな”(－.72)といった尺度項目が高い負荷を持ち，この因子は，原研究の第Ⅲ因子に対応した個人的親しみやすさの次元と解釈される。また第Ⅱ因子は，“慎重な－軽率な”(－.75)，“無分別な－分別のある”(.67)，“無責任な－責任感の強い”(.62)などが高い負荷量を持ち，原研究の第Ⅱ因子に対応した社会的望ましさの次元を表わしている。第Ⅲ因子は，“消極的な－積極的な”(.82)，“社交的な－非社交的な”(－.72)と続くことから，原研究の第Ⅰ因子に対応した活動性の次元と解釈できる。原研究で得られた因子構造と本研究のそれとを比較して特に指摘すべき点は，因子寄与率の順位に関して個人的親しみやすさと活動性とが逆転していることである。しかし，刺激人物や分析手法の差異にもかかわらず総じて原研究との対応は良く，しかもここで析出された3因子は，全79尺度の分析から得られた上位3因子と意味内容が非常によく一致している。

次に，表3.に示した<飯島>尺度による検討に移る。ここでも，3因子までで全分散の約56%が説明された。第Ⅰ因子は，“きらいな－すきな”(.86)，“感じのよい－感じの悪い”(－.84)，“つめたい－あたたかい”(.83)，“親切な－いじわるな”(－.81)といった尺度項目の負荷が高く，全79尺度および<大橋>尺度による分析で見いだされた個人的親しみやすさの次元と同じ内容を持つ。また，この因子は原研究の第Ⅱ因子(魅力性)との間で意味の類似性が認められる。第Ⅱ因子は，原研究の第Ⅰ因子(社会的活動性)と非常によく類似した活動性の次元を表わしている。第Ⅲ因子には，“頭の悪い－頭の良い”(.60)，“雑な－こまやかな”(.56)，“たよりない－しっかりした”(.49)などの尺度が高い負荷を示しており，この因子は社会的望ましさの次元を表わすものと解釈されるが，原研究ではこ

で同じ尺度項目が重複して用いられている場合には，その項目の因子負荷量をその都度示した。

1) 表2.の左端に示した因子構造は，数枚の女子大生の顔写真(白黒)を刺激として，それらの人物から受けるパーソナリティ印象を105組の尺度上で評定させた資料をセントロイド法で因子分析した結果から，最終的に選定された20尺度の負荷量のみを転記したものである(大橋ら，1973　P.101　参照)。

表2. ＜大橋＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度＼因子	原研究の結果				本研究の結果				全79尺度による因子分析				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 消極的な－積極的な	**79**	−12	1		9	8	**82**	69	−3	29	**73**	−4	−1
2. 人のよい－人のわるい	**46**	−37	−37		**−81**	−16	−11	69	**−77**	−13	−24	−11	−9
3. なまいきな－なまいきでない	**−65**	38	19		**60**	22	−21	45	**57**	15	−13	37	12
4. 近づきがたい－人なつっこい	−29	8	38		**67**	−9	33	56	**56**	−4	**46**	9	7
5. かわいらしい－にくらしい	20	−29	**−49**		**−69**	−34	−2	60	**−75**	−29	−4	−1	−20
6. 心のせまい－心のひろい	13	40	11		**70**	36	9	63	**64**	36	20	25	13
7. 社交的な－非社交的な	**−71**	14	−4		−23	4	**−72**	57	−11	−15	**−74**	2	−11
8. 無責任な－責任感の強い	3	**78**	13		**52**	**62**	10	67	**59**	**55**	4	5	−11
9. 慎重な－軽率な	17	**−74**	3		−11	**−75**	10	58	−25	**−63**	27	6	6
10. 恥かしがりの－恥しらずの	**80**	−15	−9		−33	−39	**58**	59	**−49**	−13	**55**	−2	−7
11. 軽薄な－重厚な	−13	**57**	9		17	**54**	6	32	21	**54**	−4	12	0
12. うきうきした－沈んだ	−41	7	−37		**−45**	32	**−59**	66	−28	15	**−74**	−12	2
13. 卑屈な－堂々とした	43	27	23		25	23	**55**	42	15	39	**54**	8	−7
14. 感じのよい－感じのわるい	17	−44	**−60**		**−79**	−35	−13	76	**−76**	−35	−16	−11	−16
15. 無分別な－分別のある	−8	**53**	28		43	**67**	−4	64	**52**	**57**	−10	0	10
16. 親しみにくい－親しみやすい	−21	26	24		**81**	8	24	72	**70**	11	39	14	5
17. 意欲的な－無気力な	**−72**	−31	−11		−25	**−46**	−38	42	−21	**−54**	−26	−1	8
18. 自信のある－自信のない	**−78**	−28	1		11	−36	**−50**	39	11	**−51**	−31	20	3
19. 短気な－気長な	**−64**	34	19		31	18	−26	20	25	11	−25	**64**	0
20. 親切な－いじわるな	**49**	−41	−32		**−72**	−35	−20	68	**−75**	−31	−22	0	−1
寄与率 $\Sigma a_i^2/N \times 100$ (%)	25.6	13.5	6.1		26.7	14.8	14.8						

表3. ＜飯島＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度＼因子	原研究の結果				本研究の結果				全79尺度による因子分析				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 消極的な－積極的な	**63**	20	−14	45	10	**71**	31	67	−3	29	**73**	−4	−1
2. 感じのよい－感じのわるい	−16	**−47**	−25	31	**−84**	−13	−16	75	**−76**	−35	−16	−11	−16
3. 悲観的な－楽天的な	42	0	14	20	21	44	−24	30	20	−6	**48**	18	−20
4. 社交的な－非社交的な	**−72**	−11	11	54	−16	**−72**	−19	60	−11	−15	**−74**	2	−11
5. 静かな－にぎやかな	**57**	−5	−34	44	−6	**85**	−15	75	−1	−18	**83**	−9	−2
6. みにくい－美しい	31	**51**	0	35	**68**	3	35	66	**60**	38	2	0	34
7. きらいな－すきな	16	**51**	23	34	**86**	2	10	78	**81**	37	5	2	−4
8. かわいらしい－にくらしい	−3	**−51**	−10	28	**−76**	−2	−17	67	**−75**	−29	−4	−1	−20
9. 明るい－暗い	**−52**	4	−40	44	**−52**	**−68**	3	74	**−47**	−11	**−70**	−6	−9
10. おとなしい－活発な	**61**	1	21	42	−9	**86**	−1	75	−9	−5	**83**	−9	0
11. 清潔な－不潔な	−13	−37	−25	21	−42	8	−44	70	−35	**−50**	8	3	−22
12. かたい－やわらかい	15	9	19	7	44	33	−21	58	**45**	−20	37	23	19
13. 小供っぽい－大人っぽい	8	−9	−12	3	3	7	42	19	−19	**53**	10	10	21
14. 健康な－病的な	**−45**	−8	−29	29	−28	−30	10	27	−27	−10	−32	−7	10
15. つめたい－あたたかい	20	13	**51**	32	**83**	18	0	74	**79**	14	21	18	6
16. しつこい－さっぱりした	35	28	16	23	**59**	7	9	38	**52**	33	10	12	−3
17. 頭の悪い－頭の良い	26	34	7	19	44	9	**60**	56	26	**65**	9	11	26
18. 内向的な－外向的な	**69**	−1	3	48	13	**83**	16	73	8	12	**81**	−4	16
19. ほがらかな－いんうつな	**−60**	3	−40	53	**−55**	**−64**	11	77	**−52**	−7	**−65**	−8	−8
20. 人のよい－人のわるい	−2	−15	**−57**	35	**−79**	−20	7	68	**−77**	−13	−24	−11	−9
21. いじっぱりな－すなおな	8	28	**57**	41	**50**	−5	9	28	44	11	−4	41	10
22. ふまじめな－まじめな	−18	25	44	29	**52**	−20	38	58	39	**57**	−19	−4	−17
23. 誠実な－不誠実な	8	−29	−35	21	**−76**	13	−34	72	**−65**	**−53**	12	1	−3
24. 無口な－おしゃべりな	**67**	−7	−9	46	−6	**80**	−13	66	0	−16	**78**	−12	−5
25. 雑な－こまやかな	−29	**56**	12	41	30	−30	**56**	54	18	**49**	−30	16	41
26. 親切な－いじわるな	6	−13	**−47**	24	**−81**	−19	−12	72	**−75**	−31	−22	0	−1
27. たよりない－しっかりした	24	**45**	8	27	**62**	17	**49**	73	**45**	**72**	19	−4	6
28. ユーモアのある－ユーモアのない	**−50**	−8	−21	30	**−59**	**−52**	4	66	**−52**	−8	**−56**	−12	−18
29. 魅力のある－魅力のない	−24	−42	−22	28	**−68**	−3	−22	62	**−59**	−40	−7	−6	−17
30. はでな－じみな	**−61**	−16	36	53	10	**−62**	−3	50	5	17	**−60**	14	−36
寄与率 $\Sigma a_i^2/N \times 100$ (%)	16.2	8.1	8.6		28.4	20.2	7.1						

表 4. ＜中里＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度	因子	原研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	本研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	全79尺度による因子分析 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 内向的な－外向的な	〈向性〉	**60**		**68**	84	3	**81**	7	67	8	12	**81**	−4	16
2. 無口な－おしゃべりな				**77**	81	−27	**77**	1	66	0	−16	**78**	−12	−5
3. 静かな－にぎやかな		**49**		**77**	83	−28	**80**	0	72	−1	−18	**83**	−9	−2
4. 外面的な－内面的な				**−84**	75	9	**−74**	6	55	10	−1	**−75**	4	−8
5. 丸い－角のある	〈情緒安定性〉		**−77**		65	−19	−1	**−74**	58	**−73**	−2	−3	−27	−8
6. つめたい－あたたかい			**71**		68	24	21	**81**	75	**79**	14	21	18	6
7. 自分勝手な－思いやりのある			**74**		69	**52**	5	**64**	68	**67**	40	0	34	15
8. 親切な－いじわるな			**−83**		72	−40	−29	**−67**	69	**−75**	−31	−22	0	−1
9. 勇敢な－おく病な	〈強靱性〉	**−83**			82	−33	**−69**	−10	59	−12	−42	**−64**	−8	3
10. たくましい－弱々しい		**−79**			74	−25	**−59**	−11	42	−18	−32	**−55**	5	17
11. 意欲的な－無気力な		**−74**			65	**−50**	−33	−15	38	−21	**−54**	−26	−1	8
12. 消極的な－積極的な		**77**			78	16	**76**	−2	60	−3	29	**73**	−4	−1
13. 誠実な－不誠実な	〈誠実性〉		**−77**		73	**−64**	2	**−51**	67	**−65**	**−53**	12	1	−3
14. 清潔な－不潔な			**−76**		73	**−58**	−1	−22	39	−35	**−50**	8	3	−22
15. ふまじめな－まじめな			**69**		61	**59**	−8	31	46	39	**57**	−19	−4	−17
16. だらしない－きちんとした			**57**	**−54**	66	**67**	7	15	48	30	**62**	−5	−2	18
17. 健康な－病的な	〈過敏性〉	**−61**		**−69**	86	−12	−31	−25	17	−27	−10	−32	−7	10
18. 安定した－不安定な		**−78**			77	**−76**	−9	−23	63	−35	**−67**	0	−16	1
19. 鈍感な－敏感な		**−68**			48	43	35	16	33	23	44	28	−3	35
20. 信じやすい－懐疑的な				**−75**	65	−3	2	**−67**	45	**−60**	9	−3	−26	15
21. 理性的な－感情的な	〈理知性〉		**−46**	**67**	67	**−56**	6	−13	34	−12	**−50**	10	**−51**	−2
22. 情熱的な－冷静な		**−46**		**−48**	58	23	**−47**	−28	36	−21	15	**−46**	21	−3
23. 感覚的な－理知的な				**−73**	66	**64**	0	−10	42	1	**64**	−5	16	6
24. 慎重な－軽率な				**76**	72	**−67**	17	−10	48	−25	**−63**	27	6	6
寄与率 $\Sigma a_i^2/N \times 100$ (%)		31	30	39		19.5	19.0	13.5						

注）原研究の寄与率は相対分散で示されている。

表 5. ＜林＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度	因子	原研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	本研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2	全79尺度による因子分析 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 心のせまい－心のひろい		**88**	25	23	99	**68**	41	15	66	**64**	36	20	25	13
2. 明るい－暗い		**−92**	18	−22	92	**−81**	16	−20	73	**−47**	−11	**−70**	−6	−9
3. しつこい－さっぱりした		**81**	34	21	82	43	40	12	36	**52**	33	10	12	−3
4. 無責任な－責任感の強い		**47**	**74**	31	87	**47**	**57**	37	69	**59**	**55**	3	5	−11
5. 親しみにくい－親しみやすい		**97**	0	5	95	**79**	18	9	67	**70**	11	39	14	5
6. 意欲的な－無気力な		**−45**	25	**−75**	82	−31	−20	**−58**	47	−21	**−54**	−26	−1	8
7. あきっぽい－がまん強い		10	**86**	17	78	−5	**59**	41	52	18	**58**	−28	7	−5
8. 自信のある－自信のない		1	−2	**−94**	88	−3	3	**−66**	44	11	**−51**	−32	20	3
9. ふまじめな－まじめな		33	**83**	−11	81	14	**57**	**48**	57	39	**57**	−19	−4	−17
10. 親切な－いじわるな		**−89**	−35	15	93	**−71**	−39	−21	71	**−75**	−31	−22	0	−1
11. 消極的な－積極的な		19	−22	**93**	94	40	−38	**63**	71	−3	29	**73**	−4	−1
12. 感じのよい－感じのわるい		**−93**	−30	−2	96	**−72**	**−52**	−12	80	**−76**	−35	−16	−11	−16
13. でしゃばりな－ひかえめな		2	**76**	**−58**	92	15	**73**	−20	60	**52**	24	−43	18	12
14. 信頼できる－信頼できない		**−64**	**−70**	−19	93	**−57**	**−60**	−32	79	**−69**	**−55**	−5	−4	−2
15. ユーモアのある－ユーモアのない		**−90**	24	−25	94	**−81**	3	−12	67	**−52**	−8	**−56**	−12	−18
16. いじっぱりな－すなおな		**70**	39	−42	82	35	36	3	25	44	10	−4	41	10
17. 知的な－知的でない		−1	**−70**	−14	51	−34	**−45**	−44	51	−32	**−65**	−6	−15	−19
18. 落ちついた－せっかちな		17	**−85**	13	77	−1	**−67**	−3	44	−27	−41	42	−22	−15
19. 誠実な－不誠実な		**−58**	**−78**	−2	94	−43	**−67**	−27	70	**−65**	**−53**	12	1	−3
20. 意志が弱い－意志が強い		4	27	**89**	87	9	19	**54**	34	−1	**64**	20	10	−9
寄与率 $\Sigma a_i^2/N \times 100$ (%)		37.7	28.4	20.3		24.4	20.8	12.9						

れに対応した因子は得られていない。他方，原研究の第Ⅲ因子（道徳性）に高い負荷を持つ尺度項目は今回の分析における第Ⅰ因子に対しても高い負荷を示しており，これと同じことは原研究の第Ⅱ因子（魅力性）についても言える。このような結果は，＜飯島＞のいう魅力性（寄与率8.1％）および道徳性（寄与率8.6％）の次元は，本研究で析出された個人的親しみやすさ（寄与率28.4％）の次元の下位因子として位置づけらるることを示唆している。いずれにせよ，飯島（1961）の研究においては，“頭の悪い－頭の良い”，“ふまじめな－まじめな”，“誠実な－不誠実な”などの尺度項目がどの因子に対しても0.45以上の負荷を持たず，本研究でいう社会的望ましさの次元に関した因子が抽出されていない点に問題が残る。

表4.は＜中里＞尺度による検討の結果を示している。ここで用いられた24尺度は，長島ら（1967）の Self－Differential尺度（Form A）の中から，向性，情緒安定性，強靱性，誠実性，過敏性，理知性の6因子に高い負荷量を持つ尺度をそれぞれ4つづつ選択したものである。今回の分析では，第Ⅲ因子までで全分散の約52％が説明された。自己概念の記述の場合に独立した因子として得られていたものが，他者のパーソナリティ認知の場合には，因子間に融合が起こることは中里ら（1976）の結果と同様である。

第Ⅰ因子は，誠実性と理知性を主内容とする社会的望ましさの次元と解釈できる。また，第Ⅱ因子は向性と強靱性とが融合した力本位（dynamism）の次元を表わしている。第Ⅲ因子は情緒安定性の因子が比較的独立した次元として抽出されているが，この因子で高い負荷を持つ尺度項目はいずれも全79変数に基づく因子分析での第Ⅰ因子にも高い負荷を持つことから，これまでと同じ個人的親しみやすさの次元と解釈することも可能である。しかし，今回の分析で得られた3因子構造は，中里ら（1976）のそれとかなりの食い違いを示しており，この点については今後の検討を要する。特に，これまでの本研究の結果では，相互に独立な次元に属すると考えられる誠実性（社会的望ましさ）と情緒安定性（個人的親しみやすさ）が，中里ら（1976）の結果では1つの因子（第Ⅱ因子）として抽出されていることは注目に価する。

表5.は＜林＞尺度による分析結果を示している。ここでも固有値≧1.0の因子が3つ抽出され，これらで全分散の約58％が説明された。第Ⅰ因子は，“明るい－暗い”（－.81）．“ユーモアのある－ユーモアのない”（－.81），“親しみにくい－親しみやすい”（.79）．“感じのよい－感じのわるい”（－.72）といった尺度の負荷量が高く，明朗性の次元を含んだ個人的親しみやすさの次元と解釈される。第Ⅱ因子は，これまでと同様な社会的望ましさの次元を表わしている。第Ⅲ因子は，“自信のある－自信のない”（－.66）．“消極的な－積極的な”（.63），“意欲的な－無気力な”（－.58）などの負荷量が高く，この因子は＜中里＞尺度による検討の第Ⅱ因子と類似した力本性の次元を表わすものと解釈できる。

次に，他者のパーソナリティ認知の次元を扱った研究としてよく引用される＜Levy & Dugan＞尺度による分析結果を表6.に示す。ここでは，2因子で全分散の約56％が説明され，第Ⅰ因子は社会的望ましさの次元，第Ⅱ因子は個人的親しみやすさの次元を表わすものと解釈された。Levy & Dugan（1960）は表の左側に示したような4因子をそれぞれ，一般的評価バイアス，有害性，信頼性，あいその良さと解釈しているが，今回の分析では，これと対応した因子構造は見られなかった。原研究における第Ⅱ因子以下は寄与率も小さく，これを無理に解釈することには疑問が残る。また，ここで用いられた尺度項目の中には活動性を表わすような尺度が含まれていないことも大きな問題点である。

最後に，＜Norman＞尺度で検討した結果を表7.に示す。固有値≧1.0の因子が4つ抽出され，これらで全分散の約50％が説明された。しかし，因子の単純構造という点では原研究の方が明瞭である。第Ⅰ因子はNorman（1963）が見いだした第Ⅴ因子（文化）に対応しており，やはり文化（的洗練性）と解釈するのが妥当であろう。第Ⅱ因子は，原研究の第Ⅱ因子（温厚性）と第Ⅲ因子（良心性）とが融合した因子である。また，第Ⅲ因子は原研究の第Ⅰ因子（外向性）とほぼ一致した活動性の次元を表わしている。第Ⅳ因子では，原研究の第Ⅳ因子（情緒安定性）と第Ⅱ因子（温厚性）とが融合している。これまで述べてきた結果の解釈の枠組にしたがえば，第Ⅰ因子は社会的望ましさの次元の，第Ⅳ因子は個人的親しみやすさの次元の下位因子として位置づけることもできる。

3. 因子得点に基づく諸因子間の関連性の検討

表8.は，前項で見てきた各尺度群毎の因子分析から析出された諸因子の間の関連性を，全140サンプルがこれらの因子に対して持つ因子得点間の積率相関係数によって示したものである。

全79尺度による因子分析から得られた第Ⅰ因子（個人的親しみやすさ）は，＜大橋＞尺度の第Ⅰ因子，＜飯島＞尺度の第Ⅰ因子，＜中里＞尺度の第Ⅲ因子，＜林＞尺度の第Ⅰ因子，＜Levy & Dugan＞尺度の第Ⅱ因子，＜Norman＞尺度の第Ⅱ因子との間でいずれも r ≧.70 の相関を持つ。他方，全尺度による因子分析における第Ⅱ因子（社会的望ましさ）は，＜大橋＞尺度の第Ⅱ因子，＜飯

表6. ＜Levy & Dugan＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度＼因子	原研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	h^2	本研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ′	Ⅱ′		全79尺度による因子分析 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 良い－悪い	**-75**	32	-7	-6	67	**-66**	**-63**	**-91**	6	83	**-84**	-36	-8	-7	-7
2. 安全な－危険な	**-56**	37	-2	-5	45	**-60**	-34	**-68**	-12	47	**-55**	**-45**	3	-5	6
3. 親切な－いじわるな	**-45**	**48**	-7	-8	44	**-58**	**-58**	**-82**	7	68	**-75**	-31	-22	0	-1
4. 信頼できる－信頼できない	**-65**	-9	-36	0	56	**-76**	-43	**-86**	-16	77	**-69**	**-55**	-5	-4	-2
5. 正直でない－正直な	**65**	-3	30	-15	54	**69**	31	**73**	21	57	**61**	**45**	-5	0	-14
6. 安定した－不安定な	**-62**	-2	-30	-14	49	**-78**	-6	**-64**	**-45**	61	-35	**-67**	0	-16	1
7. 友好的な－非友好的な	**-56**	12	-17	-5	36	-27	**-63**	**-61**	31	46	**-56**	-6	**-55**	-18	2
8. 意欲的な－無気力な	**-49**	2	-17	0	27	**-45**	-15	-44	-17	22	-21	**-54**	-26	-1	8
9. 心のせまい－心のひろい	44	-12	11	18	25	**57**	**59**	**81**	-8	67	**64**	36	20	25	13
10. 幸福な－不幸な	-33	8	-8	-23	17	-30	**-46**	**-53**	16	31	**-56**	-9	-6	4	-6
11. 自分勝手な－思いやりのある	27	-4	7	34	20	**64**	**50**	**82**	3	68	**67**	40	0	34	15
12. 魅力のある－魅力のない	-25	0	-5	-36	19	**-61**	-37	**-71**	-11	51	**-59**	-40	-7	-6	-17
13. 緊張した－ゆったりした	0	-7	-5	**49**	25	6	**57**	41	-40	33	**45**	-13	16	34	-12
14. つめたい－あたたかい	21	-3	10	-4	6	41	**77**	**81**	-33	77	**79**	14	21	18	6
15. 心配な－安心な	2	-12	-2	1	2	**59**	40	**71**	7	51	**56**	37	1	24	0
寄与率 $\Sigma a_i^2/N\times 100$ (%)	22.3	3.6	2.8	4.2		31.9	23.8								

注1）原尺度の内容は，次のとおり。

1.good－bad　2.safe－dangerous　3.kind－cruel　4.reliable－unreliable　5.dishonest－honest
6.stable－unstable　7.friendly－unfriendly　8.ambitious－lazy　9.tight-fisted－generous
10.happy－unhappy　11.self-centered－thoughtful　12.attractive－unattractive　13.tense－relaxed
14.cold－warm　15.anxious－unanxious

注2）本研究の結果の右側半分には，参考のために，バリマックス回転前の負荷行列（Ⅰ′とⅡ′）を示した。

表7. ＜Norman＞尺度による検討（因子負荷行列）

尺度＼因子	原研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	h^2	本研究の結果 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	h^2	全79尺度による因子分析 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
1. 無口なーおしゃべりな	**90**	2	-2	4	0	81	-13	-14	**75**	4	61	0	-16	**78**	-12	**-5**
2. あけっぴろげなーかくしだてする	**-78**	8	-7	3	-7	62	6	-27	**-59**	-32	53	**-54**	11	**-53**	-4	13
3. 勇敢なーおく病な	**-79**	-15	20	-32	-1	79	-37	-6	**-56**	-27	53	-12	-42	**-64**	-8	3
4. 社交的な－非社交的な	**-86**	-1	18	1	2	77	-17	-7	**-71**	-10	55	-11	-15	**-74**	2	-11
5. おこりっぽい－温厚な	17	**80**	17	12	7	72	19	**55**	-22	**51**	65	43	20	-12	**65**	-1
6. しっと深い－しっと心のない	-10	**64**	20	**49**	7	70	28	25	-11	**55**	45	21	27	3	**58**	1
7. いじっぱりなーすなおな	-20	**80**	27	19	10	80	11	**52**	-3	24	34	44	11	-4	41	10
8. 協調的な－妨害的な	-33	**-74**	-28	-13	-11	76	-22	**-65**	-22	-26	59	**-61**	-30	-16	-23	7
9. 雑なーこまやかな	-33	-8	**66**	-35	20	70	**54**	38	-30	-15	56	18	**49**	-30	16	41
10. 無責任な－責任感の強い	-3	32	**86**	8	18	89	40	**60**	8	15	54	**59**	**55**	3	5	-11
11. 良心的な－良心的でない	30	-44	**-68**	2	-20	79	-32	**-75**	-25	-20	76	**-75**	-35	-13	-15	-4
12. あきっぽい－がまん強い	-5	28	**74**	12	27	72	37	38	-25	-5	34	18	**58**	-28	7	-5
13. 緊張した－ゆったりした	1	**56**	15	**61**	5	70	-6	22	18	**51**	34	**45**	-13	16	34	-12
14. 落ちついた－せっかちな	-6	-21	10	**-82**	7	73	-37	-37	41	-8	44	-27	-41	42	-22	-15
15. 情熱的な－冷静な	13	6	16	**71**	24	60	4	-4	**-58**	5	34	-21	15	**-47**	21	-3
16. 神経質な－神経質でない	21	27	0	**65**	-9	55	-13	3	22	**54**	36	13	-11	32	36	-28
17. 美的感覚にうとい－美的感覚の鋭い	-4	8	39	-10	**75**	73	43	25	20	-16	31	35	25	9	-18	40
18. 知的関心の狭い－知的関心の広い	-4	5	**47**	4	**74**	78	**65**	19	6	23	52	28	**57**	12	20	26
19. 粗雑なー洗練された	15	25	**53**	16	**46**	60	**65**	42	-7	-10	61	30	**58**	-9	4	39
20. 想像力に富んだ－単純な	-12	-19	-3	-10	**-68**	52	**-73**	-8	-4	-5	55	-21	-42	-9	-11	**-46**
寄与率 $\Sigma a_i^2/N\times 100$ (%)	16.4	15.9	16.0	12.9	10.4		13.9	14.2	13.5	8.1						

注1）原尺度の内容は，次のとおり。

1.silent－talkative　2.frank,open－secretive　3.advanturous－cautious　4.sociable－reclusive
5.irritable－goodnatured　6.jealous－not jealous　7.headstrong－mild, gentle　8.cooperative－negativistic
9.careless－fussy,tidy　10.undependable－responsible　11.scrupulous－unscrupulous
12.quitting,fickle－persevering　13.nervous,tense－poised　14.calm－anxious　15.excitable－composed
16.hypochondrical－not hypochondrical　17.artistically insensitive－artistically sensitive
18.unreflective, narrow－intellectual　19.crude, boorish－polished,refined　20.imaginative－simple,direct

注2）原研究の結果として示した因子負荷行列は，Norman（1963）の研究におけるSample C（Fraternity groups ,N=215）の結果である。

表 8. 因子得点に基づく各因子間の関連性の検討

		全79変数の因子分析					＜大 橋＞			＜飯 島＞			＜中 里＞			＜ 林 ＞			＜Levy & Dugan＞		＜Norman＞			
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
全79変数の因子分析	Ⅰ						◎			◎					◎	◎				◎		◎		
	Ⅱ	.03						◎				◎	◎					◎	◎		◎			
	Ⅲ	.01	−.01						◎		◎			◎									◎	
	Ⅳ	.03	.00	−.01																				◎
	Ⅴ	.01	.03	.00	−.01																			
＜大 橋＞	Ⅰ	.90	.04	.23	.24	.15				◎					◎	◎				◎				
	Ⅱ	.23	.85	−.26	−.07	−.04	.08						◎						◎					
	Ⅲ	−.11	.25	.88	−.12	−.06	.04	−.03			◎			◎									◎	
＜飯 島＞	Ⅰ	.93	.31	.06	.15	.04	.89	.43	.00						◎	◎			◎			◎		
	Ⅱ	.00	−.03	.98	−.07	.05	.19	−.25	.85	.02				◎									◎	
	Ⅲ	−.17	.80	−.03	−.07	.37	−.13	.62	.25	.05	−.02		◎								◎			
＜中 里＞	Ⅰ	.24	.93	−.14	.09	.06	.23	.84	.08	.49	−.17	.70							◎		◎			
	Ⅱ	.03	.13	.96	−.10	.03	.22	.12	.88	.09	.95	.11	−.01										◎	
	Ⅲ	.91	−.09	.05	.21	.02	.83	.11	−.10	.85	.03	−.21	.08	.02						◎		◎		
＜ 林 ＞	Ⅰ	.73	.06	.59	.13	.15	.86	.05	.41	.76	.56	−.09	.15	.57	.69					◎				
	Ⅱ	.53	.50	−.62	.14	.02	.39	.67	−.51	.61	−.63	.31	.67	−.52	.44	.05								
	Ⅲ	−.12	.74	.35	−.13	−.15	−.10	.56	.65	.11	.33	.64	.58	.47	−.17	.06	.02							
＜Levy & Dugan＞	Ⅰ	.55	.77	−.06	.05	.00	.51	.73	.07	.72	−.08	.48	.87	.06	.39	.41	.69	.44						
	Ⅱ	.79	−.13	.33	.22	.08	.81	−.01	.14	.75	.30	−.21	−.02	.29	.84	.79	.16	−.11	.18					
＜Norman＞	Ⅰ	.14	.74	.06	.08	.54	.24	.58	.19	.37	.04	.71	.72	.15	.08	.24	.40	.47	.61	.10				
	Ⅱ	.77	.29	−.15	.21	−.05	.67	.47	−.12	.79	−.16	.14	.47	−.09	.70	.46	.69	.11	.64	.52	.17			
	Ⅲ	.21	−.06	.88	−.25	−.03	.31	−.22	.77	.18	.88	−.08	−.16	.87	.22	.60	−.48	.29	.00	.42	−.01	.00		
	Ⅳ	.26	−.04	.24	.75	−.28	.41	−.10	.07	.32	.16	−.27	.05	.15	.34	.37	.05	−.10	.12	.44	−.03	.15	.06	

注）表の対角線より右上半分において，◎は r ≧ .70 であることを示す

島>尺度の第Ⅲ因子，<中里>尺度の第Ⅰ因子，<Levy & Dugan>尺度の第Ⅰ因子，<Norman>尺度の第Ⅰ因子との間でいずれも $r \geqq .70$ の相関を持つ。このような結果は，前項で行なった各因子の解釈の妥当性を示すと同時に，評価次元を個人的親しみやすさと社会的望ましさといった2次元に大別して考えることの有効性を裏づけている。

全尺度による因子分析における第Ⅲ因子（活動性）は，<大橋>尺度の第Ⅲ因子，<飯島>尺度の第Ⅱ因子，<中里>尺度の第Ⅱ因子，<Norman>尺度の第Ⅲ因子と $r \geqq .70$ の相関を示し，上記2大次元とは別の活動性次元の顕在性を物語る。この活動性の次元を表わす尺度項目が<Levy & Dugan>には含まれていないことは既に指摘したが，全尺度による分析における第Ⅲ因子（活動性）と<林>尺度の第Ⅲ因子（力本性）との相関もそれほど高くない（$r = 0.35$）。むしろ，<林>尺度で得られた力本性の因子は全尺度による分析における第Ⅱ因子（社会的望ましさ）と高い正の相関（$r = 0.74$）を持っており，総じて，<林>尺度による分析で抽出された因子は他の尺度群による因子分析結果との対応が不明確である。

4. 偏相関および刺激人物の好・嫌別にみた因子構造の差異

Kuusinen（1969）によれば，他者に対するパーソナリティ評定の資料から，halo－effectによる反応バイアスを除去すると，パーソナリティ認知のより記述的な次元が抽出できるとされる。今回収集された資料では，被験者は各刺激人物を"良い－悪い"といった尺度上で2度にわたり評定している。そこで，この2尺度における評定の平均値を被験者毎に算出し，この値を，当該刺激人物に対する"評価尺度"での評定と考える。そして，<大橋>が用いた20組の尺度にこの"評価尺度"を加えた21×21の積率相関行列を求め，これを"評価尺度"でpartial outした20×20の偏相関行列に変換する。この偏相関行列を主因子法にかけ，バリマックス回転した結果が表9.の左側に示されている。

ここでは，固有値 $\geqq 1.0$ の因子が5つ抽出された。第Ⅰ因子は，"消極的な－積極的な"（.77），"社交的な－非社交的な"（－.72），"恥かしがりの－恥しらずの"（.69）などの負荷量が高いことから，活動性の次元と解釈される。第Ⅱ因子は，"慎重な－軽率な"（－.65），"無分別な－分別のある"（.57），"軽薄な－重厚な"

表9. 偏相関および刺激人物の好・嫌別にみた因子構造（<大橋>尺度による）

尺度＼因子	全評定資料の偏相関因子分析					好きな人物に対する評定資料の因子分析				嫌いな人物に対する評定資料の因子分析		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1. 消極的な－積極的な	**77**	2	15	23	−14	**89**	17	−15	−11	**75**	12	2
2. 人のよい－人のわるい	−11	31	−36	−26	−19	−6	**−65**	9	−3	−4	14	**−70**
3. なまいきな－なまいきでない	−15	−5	5	5	**57**	−16	8	14	**56**	−33	−3	36
4. 近づきがたい－人なつっこい	34	−32	**48**	2	6	**47**	18	**−50**	16	19	−30	**50**
5. かわいらしい－にくらしい	4	−13	**−45**	1	−5	6	−41	11	−32	6	−14	−30
6. 心のせまい－心のひろい	12	6	28	19	22	17	33	14	17	−3	15	**47**
7. 社交的な－非社交的な	**−72**	11	−14	−6	16	**−84**	−7	5	−9	**−69**	5	−29
8. 無責任な－責任感の強い	−3	29	10	**70**	4	5	**66**	18	−8	−2	**59**	19
9. 慎重な－軽率な	17	**−65**	1	−21	2	10	−21	**−54**	−18	16	**−78**	6
10. 恥かしがりの－恥しらずの	**69**	−22	−7	−2	−10	**64**	−17	−13	−2	**76**	−22	1
11. 軽薄な－重厚な	16	**56**	−10	−2	16	2	3	**60**	21	9	**45**	−10
12. うきうきした－沈んだ	**−57**	42	−38	−3	5	**−51**	−12	**53**	13	**−64**	43	−32
13. 卑屈な－堂々とした	**57**	15	14	12	−3	**59**	7	13	−42	**49**	14	15
14. 感じのよい－感じのわるい	−8	−8	**−65**	−18	−1	−7	**−54**	19	−34	−9	−24	**−56**
15. 無分別な－分別のある	−12	**57**	21	22	−1	−1	**51**	42	−14	−25	**64**	16
16. 親しみにくい－親しみやすい	24	−29	**58**	19	12	38	36	−36	24	16	−25	**64**
17. 意欲的な－無気力な	−33	−21	−5	**−57**	−7	−32	−36	−5	−5	−33	**−51**	−24
18. 自信のある－自信のない	−37	−29	−1	−27	30	**−53**	−10	4	25	−39	**−58**	3
19. 短気な－気長な	−17	14	15	2	**58**	−2	9	19	**49**	−41	−2	7
20. 親切な－いじわるな	−14	12	−29	**−51**	−2	−1	**−57**	−4	−7	−25	−14	**−50**
相対分散	42.9	25.3	19.1	6.6	6.1	45.4	29.2	15.2	10.1	43.6	32.9	23.5

(.56) などの尺度項目の負荷量が高く，理知性の次元を表わしている。第Ⅲ因子は，“感じのよい－感じのわるい”(－.65)，“親しみにくい－親しみやすい”(.58)，“近づきがたい－人なつっこい”(.48) といった尺度項目の負荷が高く，親和性の次元と解釈できる。第Ⅳ因子は，“無責任な－責任感の強い”(.70)，“意欲的な－無気力な”(－.57)，“親切な－いじわるな”(－.51) などの負荷が高いことから，誠実性の次元と解釈される。最後に，第Ⅴ因子は，“短気な－気長な”(.58)，“なまいきな－なまいきでない”(.57) の2尺度の負荷量が高く，温厚性の次元と解釈できる。

次に，この偏相関に基づく因子構造を，既に表2.に示した通常の主因子法による結果と比較してみる。すると，偏相関因子分析で析出された第Ⅱ因子あるいは第Ⅳ因子に高い負荷量を持つ尺度項目の大部分は，先の分析における第Ⅱ因子（社会的望ましさ）にも高い負荷を示し，他方，偏相関因子分析で析出された第Ⅲ因子あるいは第Ⅴ因子に高い負荷量を持つ尺度項目の大部分は，先の分析における第Ⅰ因子（個人的親しみやすさ）にも高い負荷量を持っている。このような結果は，理知性および誠実性は社会的望ましさの下位因子として，親和性および温厚性は個人的親しみやすさの下位因子として位置づけられることを示唆しており，興味深い。

表9.の右側には，収集された資料を刺激人物の好・嫌別に因子分析した結果が示されている。

好きな人物に対する評定の第Ⅰ因子には，“消極的な－積極的な”(.89)，“社交的な－非社交的な”(－.84)，“恥かしがりの－恥しらずの”(.64) などの尺度項目が高い負荷量を持っており，活動性の次元と解釈できる。第Ⅱ因子は，“人のよい－人のわるい”(－.65)，“親切な－いじわるな”(－.57)，“感じのよい－感じのわるい”(－.54) などの尺度項目の負荷が高いことは個人的親しみやすさの次元と類似しているが，この他に“無責任な－責任感の強い”(.66)，“無分別な－分別のある”(.51) といった社会的望ましさを表わすような項目の負荷量も高い。第Ⅲ因子は，“軽薄な－重厚な”(.60)，“慎重な－軽率な”(－.54)，“うきうきした－沈んだ”(.53)，“近づきがたい－人なつっこい”(－.50) などの負荷が高く，塗師（1969）のいう沈厚性の因子に近い。第Ⅳ因子は，“なまいきな－なまいきでない”(.56)，“短気な－気長な”(.49) の2尺度の負荷が高いことから，偏相関因子分析の第Ⅴ因子と同じく温厚性の次元を表わすものと解釈できる。

嫌いな人物に対する評定の第Ⅰ因子は，“恥かしがりの－恥しらずの”(.76)，“消極的な－積極的な”(.75)，“社交的な－非社交的な”(－.69) などの負荷が高く，活動性の次元と解釈できる。また，第Ⅱ因子，第Ⅲ因子は，これまでしばしば析出された社会的望ましさの次元，個人的親しみやすさの次元と解釈できる。

以上のように，嫌いな人物に対する対人認知構造は，これまでと同様な主要3次元によって解釈できるのに対して，好きな人物について得られた結果の解釈はやや困難である。

Ⅳ　討論と今後の課題

本研究は，従来いくつかの研究により提唱されてきた他者のパーソナリティ認知に際して人々が共通して働かす基本次元の内容を整理する目的でなされた。

＜Levy & Dugan＞，＜飯島＞，＜Norman＞，＜中里＞，＜大橋＞，＜林＞の6研究のいずれかにおいて用いられた79組の尺度項目により，大学生を被験者として，好・嫌各1名の刺激人物のパーソナリティ特徴を評定させた資料を因子分析（主因子法，バリマックス回転）したところ，析出された上位3因子はそれぞれ，個人的親しみやすさ，社会的望ましさ，活動性の次元を表わすものと解釈された。

個人的親しみやすさと社会的望ましさはいずれも一般的評価次元に属するものと考えられるが，それぞれの次元が意味する内容は明確に異なっている。Rosenbergら（1968）の主張する2次元との関連で言えば，個人的親しみやすさはsocial good－bad の次元に，社会的望ましさはintellectual good－badの次元に対応している。事実，Rosenbergら（1968）のMDSの分析結果によれば，social good－bad の次元においては，“あたたかい（warm）”，“社交的な（sociable）”，“人気のある（popular）”などの特性群と“不幸な（unhappy）”，“つめたい（cold）”，“ユーモアのない（humorless）”などの特性群が当該次元の両極に位置しているのに対して，intellectual good－badの次元においては，“勤勉な（industrious）”，“理性的な（intelligent）”，“意志の強い（determined）”などの特性群と“愚かな（foolish）”，“無責任な（irresponsible）”，“軽薄な（frivolous）”といった特性群が対極しており，これら両次元が持つ意味内容の差異は，本研究で個人的親しみやすさと社会的望ましさと命名した2大次元と非常によく対応している。印象形成実験において，Asch（1946）が中心的役割を果すことを見いだした“あたたかい－つめたい”の特性形容詞対は，個人的親しみやすさの次元にそったものであろう。また，対人魅力の研究領域においても，Kiesler & Goldberg（1968）やChaikin & Cooper（1973）は，魅力（評価）を情緒的なもの（好感・友情）と認知的能力志向的なもの

（尊敬・賞賛）に分けてとらえている。これらの結果より，人は他者のパーソナリティを認知する場合，その人物に対する社会・対人的評価側面における好感の判断として個人的親しみやすさ，知的・課題関連的側面における尊敬の判断として社会的望ましさ，それに加えて活動性，の主要3次元を働かせると整理して考えることができる。

本研究では，他者のパーソナリティ認知に関した従来の研究で析出された諸次元の中のいくつかも，上記主要3次元と同列あるいはそれらの下位因子として位置づけられることが明らかにされた。これらについては，対人認知構造を構成する基本次元として，その暫定的枠組を図3.に示す。

飯島（1961）のいう魅力性や道徳性，Norman（1963）

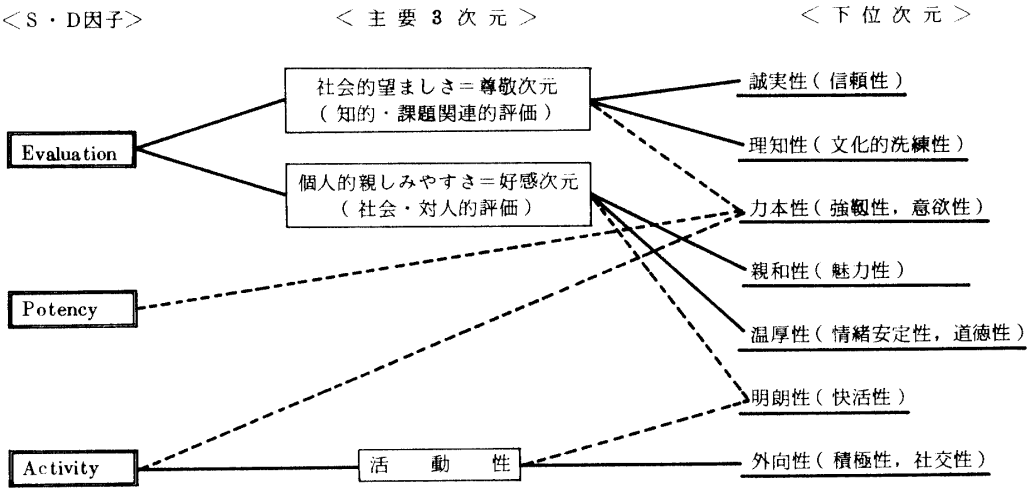

図3　対人認知構造を構成する基本次元

のいう温厚性や情緒安定性，そして本研究の偏相関因子分析において析出された親和性の因子は，いずれも個人的親しみやすさの次元の下位因子として位置づけられる。他方，Levy & Dugan（1960）のいう信頼性やNorman（1963）のいう文化，さらには偏相関因子分析で得られた理知性および誠実性の因子は，社会的望ましさの次元の下位因子として位置づけられよう。また，飯島（1961）の研究で析出された社会的活動性，Norman（1963）や中里ら（1976）のいう外向性の因子は，活動性の次元として一括できる。その他，<林>尺度による検討では，個人的親しみやすさの次元の中に明朗性を表わす尺度項目群が混在していたが，この明朗性（快活性）の因子は活動性の次元の下位因子とみなすこともできよう。なお，筆者は以前，情動安定性を社会的望ましさの次元の下位因子と考えたが（林，1977），そこでの因子の解釈にはやや無理があるため，本研究では一応，図3.に示したように修正した。

ところで，個人的親しみやすさの次元は他者のパーソナリティ認知におけるソフトな評価側面を表わし，社会的望ましさの次元はよりハードな評価側面を表わすと考えることもできる。しかし，この“ハード－ソフト”で代表される一般的意味空間におけるPotencyの次元が対人認知構造の基本次元にどのように介在しているかについては，本研究では明確な結果は得られなかった。この点に関し，<中里>および<林>尺度による検討では，強靱性（Potencyにあたる）と活動性（Activityにあたる）の次元が融合した因子が析出されたので，これを塗師（1969）にしたがって力本性（dynamism）を表わすものと解釈した。塗師（1969）は，「豊田（1962）が対人認知の基本的3次元で優勢度（Potencyにあたる）と活動度とを独立な次元として得ているのは，尺度の対語の価値的側面が統制されていないためである」と批判している。しかし，中里ら（1976）やSelf－Differentialに基づく長島ら（1967）の結果では，強靱性（意欲性）と外向性とがそれぞれ独立な因子として抽出されている。さらに，本研究の因子得点に基づく検討（表8.参照）によれば，<林>尺度による分析で得られた力本性の次元は，全79尺度の因子分析結果で析出された活動性の次元よりも社会的望ましさの次元に高い正の相関を持つことが示されている。このように，Potencyの次元は，対人認知構造におけるEvaluation（特に，社会的望ましさ）の次元と強い関連を持つのか，あるいはActivityと融合

して力本性と解釈される1つの独立な次元を構成するのかについては，今後さらに詳細な検討が加えられる必要がある。

刺激人物の好・嫌別に資料を分析した結果では，嫌いな人物に対するパーソナリティ認知については上で述べた主要3次元から成る因子構造が析出されたが，好きな人物について得られた因子は，その意味内容がやや異なっていた。特に，第Ⅱ因子において，個人的親しみやすさと社会的望ましさとが融合した次元が析出されたことは注目に価する。これと同様の次元は，中里ら（1976）の実験Ⅱにおける第Ⅱ因子（篤厚性）でも認められ，本研究で主張する対人認知構造の主要3次元説に一定の制限を加えている。

青木（1971）は，他者についてのパーソナリティ表現用語を，望ましい特徴群と望ましくない特徴群とに分けて因子分析し，それぞれ別の因子を解釈している。また，藤原（1974）は，望ましい〔望ましくない〕特性用語28語が好きな〔嫌いな〕他者のパーソナリティ特徴としてどの程度あてはまるかを評定させた資料を因子分析し，望ましい特性については対人的誠実性，明朗性，強靱性，情緒安定性の4因子を，望ましくない特性については持続性（意欲性）欠如，小心性，冷淡性，自己中心性と解釈される諸因子を見いだしている。これらの研究からも，人が好きな他者のパーソナリティ特徴を認知する際に働かす認知構造は，嫌いな他者の場合のそれとは異なっていることが示唆されており，両者における認知構造の差異の分析は，今後に残された重要な検討課題である。

その他，被験者の性および発達段階に基づく認知構造の差異，判断事態が認知の構造的特徴に及ぼす影響といった問題についても，本研究で得られた知見にそって，より包括的な検討を加える必要があろう。

<謝　辞>

本研究を進めるにあたり御指導いただきました，名古屋大学教育学部の大橋正夫教授に深く感謝致します。

文　献

青木孝悦　1971　性格表現用語における個人的望ましさの因子分析的研究．心理学研究，**42**，87－91.

Asch, S. E. 1946　Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **41**, 258-290.

Bruner, J. S., & Tagiuri, R. 1954 The perception of people. In G. Lindzey (ed.) *Handbook of social psychology* (Ist Ed.). Reading, Mass. : Addison-Wesley.

Chaikin, A. L., & Cooper, J. 1973 Evaluation as a function of correspondence and hodonic relevance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 257-264.

Cronbach, L. J. 1955 Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, **52**, 177-193.

Friendly, M. L., & Glucksberg, S. 1970 On the description of subcultural lexicons : A multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **14**, 55-65.

Hamilton, D. L., & Fallot, R. D. 1974　Information salience as a factor in impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 444-448.

林　文俊　1976*a* 対人認知構造における個人差の測定(1)－認知的複雑性の測度についての予備的検討－．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**23**，27－38.

林　文俊　1976*b* 対人認知構造における個人差の測定(2)－INDSCALモデルによるアプローチ－．日本心理学会第40回大会発表論文集，1219－1220.

林　文俊　1977　対人認知構造における個人差の測定－認知的複雑性への多次元解析的アプローチ－．名古屋大学大学院教育学研究科修士論文．

林　文俊　1978*a* 対人認知構造における個人差の測定(3)－認知的複雑性への多次元解析的アプローチ－．日本心理学会第42回大会発表論文集，1338-1339.

林　文俊　1978*b* 相貌と性格の仮定された関連性(3)－漫画の登場人物を刺激材料として－．名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**25**，41－56.

Hays, W. L. 1958 An approach to the study of trait implication and trait similarity. In R. Tagiuri & L. Petrullo (eds.) *Person Perception and interpersonal behavior*. Stanford : Stanford University Press.

藤原武弘　1974　パーソナリティ印象形式の研究－刺激特性次元の基礎的分析－．広島大学教育学部紀要（第Ⅰ部），**23**，353－361.

飯島婦佐子　1961　対人認知の構造についての因子分析的研究．日本心理学会第25回大会発表論文集，455.

Kiesler, C. A., & Goldberg, G. N. 1968　Multidimensional approach to the experimental study of interpersonal attraction : Effect of

a blunder on the attractiveness of a competent other. *Psychological Reports*, **22**, 693-705.

Kuusinen, J. 1969 Affective and denotative structures of personality ratings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 181-188.

Levin, I. P. 1973 Learning effects in information integration : Manipulation of cue validity in an impression formation task. *Memory and Congnition*, **1**, 236-240.

Levy, L. H., & Dugan, R. D. 1960 A constant error approach to the study of dimensions of social perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 21-24.

Mulaik, S. A. 1964 Are personality facters raters' conceptual factors ? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **28**, 506-511.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀　洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)－Self－Differentialの作製－. 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59－83.

中里浩明 1977 魅力形成における人格特性の次元. 心理学研究, **47**, 342－347.

中里浩明・M. H. Bond・白石大介 1976 人格認知の次元性に関する研究－Norman 仮説の検討－. 心理学研究, **47**, 139－148.

Norman, W. T. 1963 Toward an adequate taxonomy of personality attributes : Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*. **66**, 574-583.

塗師　斌 1969 対人態度における価知的認知と感情. 教育心理学研究, **17**, 144－155.

大橋正夫・三輪弘道・平林　進・長戸啓子 1973 写真による印象形成の研究(2)－印象評定のための尺度項目の選定－. 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, **20**, 93－102.

大橋正夫・平林　進・長戸啓子・吉田俊和・佐伯道治 1975 性格の印象評定における面接法と質問紙法. 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, **22**, 83－102.

Osgood, C. E. 1962 Studies on the generality of the affective meaning systems. *American Psychologist*, **17**, 10-28.

Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The measueement of meaning*. Urbana : University of Illinois press.

Passini, F. T., & Norman, W. T. 1966 A universal conception of personality structure ? *Journal of personality and Social Psychology*, **4**, 44-49.

Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. 1968 A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 283-294.

Rosenberg, S., & Sedlak, A. 1972 Structural representations of implicit personality theory. In L.Berkowitz(ed). *Advances in experimental social psychology*. Vol.6. New York : Academic Press.

豊田ふみ 1962 集団における対人認知 pattern の実験的研究. 教育心理学研究, **10**, 129－138.

（1978年7月31日受稿）